幼小リーフレット「つなぐ」

山形県教育庁義務教育課

遊びは 幼児期にふさわしい学び

＊本リーフレットでの「幼小」は、「幼児教育と小学校教育」を意味します。
また、幼稚園教師、保育教諭、保育士等を総じて「保育者」と表現しています。

幼児は、身近な環境に自ら関わり遊びを始めます。そして、遊びを通した直接体験の中で、諸感覚を大いに働かせ、自分なりに試したり工夫したりしながら活動に没頭する経験を通じて、心身の発達が促されていくのです。各園所は、幼児一人ひとりが主体性を存分に発揮して遊べるよう教育課程等を編成し、幼児理解等の高い専門性を基盤として日々の保育を展開していくことが大切です。そして、遊びを中心とした生活の中で育まれた好奇心や探究心、粘り強さ、協同性や感受性等の資質・能力が、小学校教育においてどのように発揮されるのかを見通しつつ、今後は、幼児教育の視点から「子供の育ちと学び」について小学校側と組織的に意見交換をしていくことが求められます。

幼児教育の基本（※）

幼児期の特性を踏まえ**環境**を通して行うものであること

Check 2　環境の見直しが計画的に行われていますか？

「環境を通して行う教育」は、自分から興味をもって環境に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことを重視します。幼児の主体性が何よりも大切にされている教育であり、「幼児側の視点から見れば、自由感あふれる教育である」と言えます。

このようなことはありませんか？

- 物的環境が１年中ほとんど変わりない
- 遊び道具は玩具や固定遊具中心である

Check 1　「各解説本」を園所内で活用していますか？

幼稚園教育要領解説（※）

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

保育所保育指針解説

これらは、全国的に一定の教育水準を確保するための国の規定です。幼児教育の指針として一層の整合性が図られています。

保育者

Q　幼児期に「ふさわしい」ってどんな保育をすることですか？

指導主事

A　それは小学校教育の先取りをすることではありません！

教育要領等には「小学校教育の先取りをすることではなく、就学前までの幼児期にふさわしい教育を行うことが最も肝心なことである」とあります。幼児期の発達の特性を理解し、遊びを中心とした生活の中で、幼児をどう援助していくのか、保育者としての専門性を高めていくことが強く求められています。

重視すべき事項（※）

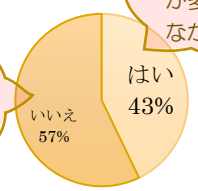
1. **幼児期にふさわしい**生活が展開されるようにすること
2. **遊びを通して**の総合的な指導が行われるようにすること
3. **一人一人の特性**に応じた指導が行われるようにすること

Check 3　「自発的な活動としての遊び」の時間が十分に確保されていますか？

Q. 午前中の「自由遊びの時間」は、学級や学年のみんなが登園して揃うまでの待ち時間になっている

遊びの時間を大切に確保しています。でも、ただ遊ばせているだけでいいのか不安…。

遊びの時間が少なく、保育者が設定した一斉活動が多いです。園の方針をなかなか変えられなくて…。



令和３年度「山形県幼児教育アンケート」（義務教育課調べ）より

教育要領等には「**幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした教育を実践することが何よりも大切である**」とあります。もちろん、幼児の主体性を重視する余り、「ただ遊ばせているだけ」でも、教育は成り立ちません。園長先生のリーダーシップのもと園内研修等の充実を図り、自発的な活動としての遊びを生み出すための環境（物的・人的環境）の在り方や教育課程の見直し等を協議し、園内の共通理解と協力体制を築いていくことが大切です。

Q　不安定で泣いてばかりの子供がいて気になっています。

Check 4　一人一人の発達の特性を肯定的に捉えていくために、園内研修や保育記録の実践をしていますか？

A　多面的な幼児理解には、保育者同士、そして家庭との連携が重要です！

幼児理解とは、幼児の行動を分析して、この行動にはこういう意味があると決め付けて解釈をすることではありません。まして何歳にはこのような姿であるというように、何かの基準に照らして評定することでもありません。幼児理解を深めるには、日々の記録やエピソードを生かし、複数の保育者で互いに考えを突き合わせていくことが不可欠です。園内研修等のもち方を工夫し、生活や遊びの具体的な姿を出し合いながら、幼児一人ひとりを多面的に捉えていきます。保護者への発信の工夫も含め、組織的な取組みが必要です。

山形県教育庁義務教育課

幼児教育と小学校教育をつながりとして捉える

２つの視点を紹介します！

幼小接続の推進には、小学校において、「幼児期における自発的な活動としての遊び」を理解する必要があります。保育参観等を通して幼児教育の様子を知ったり、参観後の意見交換や研修会の機会を計画的に設けたりすることにより、教職員同士で「遊びの中で何が育っているのか」と具体的な姿を共有し、子供の資質・能力をつなぐためのカリキュラムを協働的に編成していくことが大切です。

「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」
文部科学省国立教育政策研究所
教育課程研究センター　編著

＊本リーフレットでの「幼小」は、「幼児教育と小学校教育」を意味します。
また、幼稚園教師、保育教諭、保育士等を総じて「保育者」と表現しています。

遊びの意味は、見えにくいものです。保育参観の際には、解説を添えるなどの工夫も必要でしょう。

いーち　遊びの意味を読み解く

― 保育参観 ―

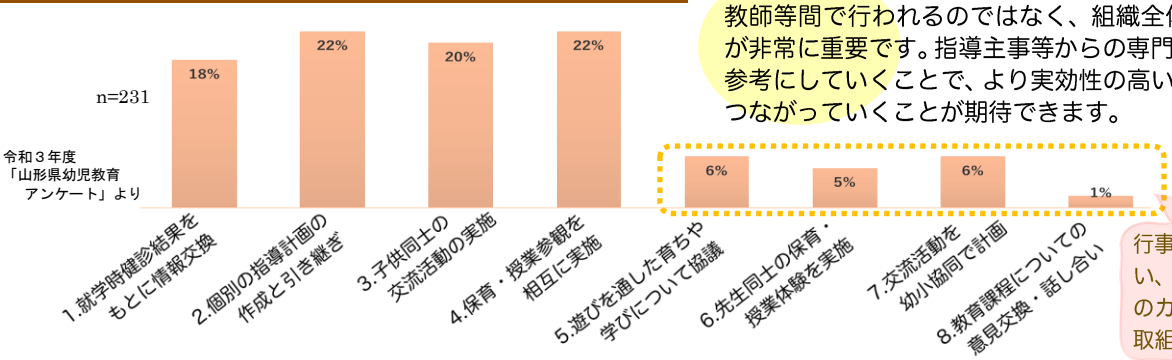
- 幼児期の生活の中心である遊びの様子を参観し、協議する場を設ける。
- 画像や映像、ポートフォリオ等を用いながら、幼児の内面の動きや活動の意味を捉え、遊びの中でその子の何が育っているのか等について、意見交換を行う。
- 保育者が今何を大切に育もうとしているのか、そのためにどんな援助をしているのか、どのような学びにつながっているのか等、幼児の育ちや学びの姿を共有する。

にーい　学びの連続性を共有する

― 授業参観 ―

- 小学校の様子を参観し、幼児期の育ちをどのように発揮しているかを共有する。
- 児童が安心して学習を広げていける環境になっているか、「環境を通して行う教育」の視点から意見交換をする。
- 「指示に従っているか」ではなく、「何をどのように学んでいるか」を捉え、協議する。
- 小学校の学びを長期的に見通し、幼児期にふさわしい生活や質の高い保育について協議する。

幼小接続のための協議会等の内容について



幼小接続のための協議会やカリキュラム編成が、一部の教師等間で行われるのではなく、組織全体で動いているかが非常に重要です。指導主事等からの専門的な指導・助言を参考にしていくことで、より実効性の高い内容・取組みへとつながっていくことが期待できます。

行事等での交流にとどまらない、資質・能力をつなぐためのカリキュラム編成に向けた取組みが、今後の課題です。

「育っている」を前提に

ほとんどの小学校では「スタートカリキュラム」が編成され、学校段階等間の接続が図られています。一方で、小学校という場所に単に慣れるカリキュラムや適応指導が中心のカリキュラムから、学びをつなごうというカリキュラムまで、カリキュラムの中身は学校によって様々です。

これからの「スタートカリキュラム」は、園長先生・校長先生のリーダーシップのもと、自発的な活動としての遊びを通して育まれてきた資質・能力を、児童が思う存分に発揮できるように、小学校の教育活動全体を対象として、カリキュラムをデザインしていくことが求められます。

＊引用・参考文献：「小学校学習指導要領」「幼稚園教育要領及び解説」「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開」「幼児理解に基づいた評価」（いずれも文部科学省）
「幼保連携型認定こども園教育・保育要領及び解説」（内閣府・文部科学省・厚生労働省）　「保育所保育指針及び解説」（厚生労働省）